■障害児と言葉

私には『親こそ最良の教師』といふ著書がある。昭和五十五年十月、グリーン・アロー出版社から刊行したものである。この本の主人公の“愛子ちゃん”は、一歳半の時、ダンプカーにはねられて、頭蓋骨陥没といふ瀕死の重傷を負ひ、数日間、意識不明のまま生死の境をさまよひ、奇跡的に命を取り留めることが出来た子供である。

頭蓋骨陥没の後遺症のため、肉体的にも精神的にも重度の障害が残り、私が初めて会った時には、五歳五か月になってゐたけれども、“あ・い・こ”の三字を毎日、一年間に亙って学習させたのにも関はらず、一字も覚えられなかったこと、また、言葉を覚えて使ふ能力が極めて低いこと、などの事を知った。

それで、私は、一日に十五回、十秒間づつ一枚の漢字カードを教へることを奨めた。それは、例へば、“花”といふ漢字カードを、実際の花と一緒に提示し、「これは“花”ね。これは“はな”といふ字よ」と言って教へてやるのである。私の著書には、二年間に瓦る記号が紹介してあるが、愛子ちゃんは二年間に三六七枚の漢字カードを学習し、その九〇パーセントを覚えて、正しく読めるやうになったのである。つまり、二年間に三三〇字の漢字を覚えたのである。

今、学校教育で、一・二年生の二年間に学習する漢字は二二一字(一年生は七六字、二年生は一四五字)であるから、愛子ちゃんはその一倍半もの漢字を覚えたことになる。重度の障害児でも、漢字はこれだけ覚えることが出来るのである。今の学校教育が、いかに間違った教育をしてゐるか、よく解るであらう。

然し、それよりも重要な事は、愛子ちゃんが漢字を覚えることにより、精神的に非常な成長をしたことである。情緒が安定し、独立心が芽生へ、二人がかりでも治療を受けるのが大変だったのに、独りで治療が受けられるやうになった事である。漢字が、このやうに人の心の働きを高める力を有ってゐる事である。

同書には、石井方式漢字教育による障害児教育を実践してゐる「創英教育研究所」(佐藤友泰所長)の実践例が紹介されてゐるが、佐藤所長は、漢字教育の効果を次のやうに述べてゐる。

第一は「情緒の安定が得られる」こと。第二は「言葉の定着が早い」こと。第三は「言葉の発達に伴ふ人間性の充実」。第四は「集中力がつく」こと。第五は「知能が向上する」こと。第六は「発語指導に適してゐる」こと。第七は「子供が意欲的になる」こと。……とあるが、漢字教育にはこのやうな効果があるのである。

さて、以上述べて来たやうに、零歳児の赤ちゃん、チンパンジー、障

害児の言葉の教育を通して考へると、「視覚言語の方が聴覚言語よりも覚え易い」こと、「漢字の方が言葉よりも覚え易い」ことは疑ふ余地も無い。これは、まことに信じ難い事ではあるが、よくよく考へてみれば道理のあることである。